# 「保育内容（環境）」と小学校「生活科」をつなぐ里山自然活動

田中卓也[1)]

# The study on relationship of Early Childhood Education instruction domain of "Environment" and Elementary school Life were connected with Satoyma for Childcare and Education

Takuya Tanaka

**Abstract**

The study on the connection between childcare contents "environment" and chirdren's life

The activities such as life and play of infants were precaptured and the connection with the "childcare content area"environment was considered. also focused on breeding culvitation activities in the garden,we examined the relationships and connections with the environment in the childcare and examined them white also considering the living departments.the role of infants and children and their experiences directly experienced through contact with the natural environment ad the role played by teachers and teachers inenvironmental education are important.

***Keywords*:** early chirdhood education instruction domain of "environment",elementary school life, satoyama,play ,nature experience

## １．はじめに―本研究の目的と先行研究の検討―

本稿は「専門演習における地域と連携した取り組み」（『共栄大学研究論集』第14号、2016年3月）の続編であり、専門演習における地域連携活動についての意義と今年度で最後の里山活動に取り組んだ学生等の学びについて、検討するものである。

なお研究対象は専門演習（ゼミ後期）の時間（「専門演習Ⅳ」）の一貫として行った里山自然活動およびゼミ学生・有志ボランティア学生であり、田中卓也ゼミ単独で実施した（なお以下の文章からは田中ゼミと略記する）。

研究方法については、ゼミ学生および有志ボランティア学生へのインタビュー調査、里山活動当日に実施した参加児童へのインタビュー、参加学生の感想文より考察を行っている。

## ２．これまでの経緯と開催時期の変更

2018（平成30）年をむかえ、専門演習を通じた里山活動は、丸5年目を迎えた。K大学の学生にも田中ゼミでは里山活動のあることが認識され、恒例の活動というイメージが認められるようになった。同時にM町の公立小学校の児童に、「毎年、K大学のお兄さん、お姉さんが夏に一緒に遊んでくれる」というイメージが定着し てきた。しかしながら昨年度は、執筆者がK大学を退職し、本年度より非常勤講師に就任し、週に1回（毎週金曜日）のみの講義に足を運ぶようになったことや、ゼミ学生の多くが夏の時期（7月から8月にかけての時期）に各地方自治体で開催される「小学校教員採用試験」を受験することが予定さ

1) 静岡産業大学経営学部
〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1

1) *School of Management, Shizuoka Sangyo University*
*1572-1, Owara, Iwata-shi, Shizuoka*

れていたため、夏から秋の時期に企画が移動することになった。田中ゼミ学生のみならず、有志ボランティア学生のなかにも多く存在していた。事前に学生から執筆者およびM教育委員会にも相談が数回にわたり持ちかけられたこともあり、最終的には彼らの要望を聞き入れる形をとった。

このような経緯で「M町教育委員会」（生涯学習課）や「NPO法人S緑のトラスト協会」の皆様、また会場を提供をしてくださる「有限会社A村」等にも、事前に相談をし、了解を得ることができ、無事秋に開催することができた。この活動は今やM町の教育の一つの柱とさえいわれるまでになった。

また里山活動を展開しているM町内にゼミ学生は、数度「A村」および「Y山」についても学生等が事前に調査する目的で幾度も訪れた。同地やその周辺地域の事情についても地理的特徴等がおおよそ把握できるようになった。

なおY山の入山には、必ずM町教育委員会（2013年開催当時の生涯学習担当職員の主査のK氏、T氏）に事前連絡をしたうえで、入るという取り組み前からの規則がある。学生等の代表者は自ら、教育委員会の担当者に連絡を入れ、それに応じて取り組んできた。また入山時には、虫刺され等の予防など、長袖、長ズボンの着用や虫除け剤による処置を徹底した。

## ３．5年間の里山活動においてお世話になった方々

この里山活動ではM町教育委員会の方々のほかに、Y山を指定管理する「S緑のトラスト協会」の代表を務めるY氏の力も大きい。Y氏は、元M町立 M中学校の理科教員であり、現在S県環境アドバイザーにも就任されていることから、理科全般を専門としている方である。里山活動はもちろんM町の児童、生徒を対象とした自然鑑賞会、ホタルの鑑賞、ツリークライミング講座など手がけているものが多い。昨年からは、同所を中心に「Y山まつり」と称する、秋の自然体験活動を取り入れるようになり、田中ゼミの有志学生らがその活動補助員として 児童や町民の方々と積極的な交流を図った。Y氏からは、里山活動の極意だけでなく、ゼミ学生の将来のことを気にかけて下さり、小学校教諭としての心得や授業のヒントなどさまざまな指導をしてくださり、大きな役割を果たして下さっている。

ここでは、里山活動で拠点となる「Y山」と「A村」について「特集　Y山の雑木林」（http://search.yahoo.co.jp/search）に掲載されている記事を中心に紹介しておきたい。

都会の人から見たらいわゆる「田舎」と言ってよいM町ですが、山や海のような自然は ありません。M町にとっての自然環境は、水田や畑、農業用水路、農家の屋敷林など、人の手によって作り出されたものが「自然」であり、町の面積の半分を占めています。こうした「自然」は農家によって維持管理されてきましたが、かつては5割近かった 農家世帯も今では1割以下にまで減ってしまいました。

・農地は生態系、景観、災害、地産地消、教育、福祉など多くのものにつながって行く。

・「農地」は農家だけのものではなく、全ての町民に恩恵をもたらしている。そんな考えを持ちながらも「宮代の自然」が減少していくことを見逃してきてしまいましたが、平成6年にM町の職員プロジェクトによる試行錯誤からスタートし、平成9年度には「農のあるまちづくり計画」を策定し、町民の代表としての商店主、主婦、農家、そして役場職員がパネラーとなってシンポジウムをおこなうまでに発展しました。これにより議論され計画の一部となったのが、「A村整備計画」です。

かつては5割近かった農家世帯も今では1割以下にまで減ってしまったことを背景として、農業の復活を期待するものとして行われている「A村整備計画」の一環のものであることがわかる。

## ４．2018年度における里山活動の概要

本年度の活動は、通常の夏に開催することをせず、秋の季節を選んだことは先述した。

M町教育委員会と田中ゼミ学生、執筆者らの協議により実施されることになった。

2018（平成30）年10月28日（日）にM町地域生活課およびNPO法人S緑のネットワーク（代表はY氏）、有限会社「A村」との共同開催で第4回「Y山まつり」が開催された。

本年度は田中ゼミの１・２期生が命名した「あそべんちゃーわーるど」という名称の里山活動については、Y山まつりの一環として行われたことになる。

その活動概要を以下に掲げる。また実施内容の具体的なとりきめは、K大学田中ゼミ5期生（13名）と5期生の友人らで構成された有志ボランティア10名の計23名の間でゼミ外の時間に話し合いが行われた。その内容を以下に示したい。

・活動名称：「里山を通した自然体験活動」（あそべんちゃーわーるど）
・活動日時：2018年10月28日（日）
　9:00 ～ 15:00（後片付けなどの時間も含む）
・活動場所：A村・Y山（S県M郡M町）Y山およびA村・広場（竹楽器づくり、かかし作り）
・協力団体：S緑のトラスト協会M支部
・活動の目的：
①子どもの主体的な集団活動による社会性の育成
②自然体験、創作体験を通した情操教育
③達成感を通した自尊感情の育成
④身近にある自然や人々とのふれあい、郷土に対する愛着心の育成
・活動内容：① あいさつ、諸注意（里山長・田中ゼミ生）
②Y山のお話（S緑のトラスト協会M支部代表・Y）
③手作り楽器づくり（M町で育った竹を使った太鼓の製作）
④かかしづくり
　参加学生：K大学教育学部（田中ゼミ4年13名、有志ボランティア10名）
　計：23名
・引率および総括責任者：田中卓也
・関係者：M町町民生活課職員：K
・参加児童：M町内在住の小学生30名

活動の目的は、小学校児童のみならず幼稚園や保育園の園児らも活動することから、「保育内容（環境）」のねらいが参考にされ、掲げられた。また活動の具体的な内容については、田中ゼミが主に担当した「③楽器作り」の内容を次に記す。

田中ゼミは本年の活動として、金曜日（前期は第5時限、後期は第3時限）のみの週１回開講であったこともあり、ゼミ学生らはゼミの時間以外にも学生同士が空いているコマを利用しながら、執筆者不在のなかにおいても、「里山長」および「副里山長」（いずれも里山活動のリーダーの総称）を中心に連絡を取り合い、準備していたようである。かかしづくりの企画提案についてもゼミ学生からあったのであるが、事前準備に時間がかかることを想定しながら、ゼミ時間外において、試作体験などを行っていたようである。このように学生らが互いに時間をみつけては、大学内もしくはY山に足を運び、協力しながら準備していた。このことも大きな成功の要因であったと考えられる。

田中ゼミでは、Y山一帯を使用しての「楽器づくり」を開催した。小学校児童とゼミ学生（ボランティア学生）が交流を図るようにするため、グループをつくり、各グループが、ひとつずつ竹を持ち寄り、学生が事前に準備しておいた、工具を使用しながら楽器を完成させた。Y山一帯の場所に定め、学生と交流を図りながら、児童が完成させるものである。製作時間に差は生じるが、なんとかみなが完成できたことは大きい。「来年もぜひやりたい」、「こんどはもっと大きい楽器を作りたい」、「大学生のみなさんと一緒にずっと行いたい」という参加した児童の声を聴くことができた。児童らは、竹楽器づくりに今後も参加していきたいという主張を目の当たりにするだけでなく、今後も竹楽器作りに大きな関心を持っていることを確認できた。「大学生のみなさんと一緒にずっと行いたい」という声には、多くの参加学生も感動したようで、一層力が入ったのであろうと感じている。こういう声を聞きながら、彼らは多忙であるも

のの、最後までやり通す原動力にもなるほど大きなものであった。

## ５．小学校生活科の授業とのつながり

今回参加した児童は、幼少期のころから参加している子どもも多く、ある意味では、新人というよりもOB・OGのような感覚で、参加している雰囲気を感じさせた。幼少期に参加した子どもたちの多くは、幼児の頃からほとんど参加していた。いわゆる「保育内容（環境）」としての里山活動に参加していることが多く、植物観察、どんぐり製作体験、ウォークラリー等を卒業した後、田中ゼミ学生らの企画に参加し楽しさを味わった。子ども等がやがて小学生になり、再びこの活動に参加してくれることを考えると、小学校低学年に配当されている「生活科」への取り組みとして参加してくれているように感じることができる。

『小学校学習指導要領　生活編』（2017年度改訂）の目標には、「第１に具体的な活動や体験を通して、人や社会、自然とのかかわりに関心をもち、自分自身について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に着けさせる」と明記されている。M町で行っている里山活動は、「人や社会、自然とのかかわりに関心をもたせ」るものとして、児童らは「生活上必要な習慣や技能を身に着け」ていることがうかがえる。のこぎりや竹等は家庭で、見る経験を有するものの、使用するということになると児童の参加者全員が経験しているとは言い難い。里山活動がこれを補うべく効果を発揮しているものと見ることができる。

また「知的な気付きを大切にする指導」においても生活科では大切にされてきている。「この気づきは、対象に対する一人一人の認識であり、児童の主体的な活動によってうまれるものである。。そこには知的な側面だけではなく、情意的な側面も含まれる。また、気づきは次の自発的な活動を誘発するものとなる」とあることから、里山活動での体験を繰り返したり、他者とともに活動したりすることで、自分と対象とのかかわりが深まり、気付きが質的に高まっていくようにするとともに、気付きの質を高めて、次の活動や体験の一層の充実につながっていくことを目指している」とあり、児童には学的な見方や考え方の基礎を身に着けさせることにつながるものとなる。現に児童らは、自然の不思議さ面白さを実感する学習活動を取り入れることが要請されている。

児童の感想のなかでも、「さとやまかつどうにいってみたら、とってもたのしかった。のこぎりをきったことがないから、たいへんだったけど、こんどはじぶんできってみたい」（小２・男子）とか、「大学のお兄さんに、竹の切り方をおしえてもらし、竹をうまく切ることができた。うれしかった」（小３女子）、「竹楽器で音が鳴ってよかった。自分が想像していた音とはちがっていたので、びっくりした。クラスの友だちと一緒に竹楽器で合そうをしたが、うまくできず残念であった」（小４男子）など、さまざまな感想がみられ、この体験を通して、児童それぞれに大きな発見を得ていることもわかる。

写真１ かかし作成に学生とともに協力する児童

写真２ かかし家族のでき上がり！！

写真３ 大学生のお姉さんの指導のもと、竹切り開始！

写真４ 大学生のお兄さんのやさしい指導を聞き入る幼児

写真５ 竹切り指導に余念のない田中ゼミ学生

写真６ 作った竹楽器で合奏！♪1、2、3、ハイ！！

## ６．おわりに－5年間の里山活動と今後の課題やあり方を考える－

K大学教育学部田中ゼミの「専門演習」の一環として取り組んできた「あそべんちゃーわーるど」は今回で終わることになった。執筆者は、どの取り組みも大成功であったと自負している。

里山活動終了後には、ゼミ学生をふくめた参加学生全員に感想文A4用紙1枚（字数は1,200字程度）において書かせ、執筆者のほうに提出させている。このたびも終了後に学生に感想を書かせた。その一部を紹介したい。

「今年で2回目の里山活動であったが、いろいろな幼児や児童と関われたことは、大きな財産になった。4月から地元で小学校教諭になるが、この経験をいかせたらと思う」（Y・K　男子学生4年生）とか、竹切りは子どもたちの前で実践することになっていたので、少々緊張したが、やり始めたらうまくいったと感じた。先生らしいところを子どもたちの前で見せつけることができた」（H・H　男子学生4年生）などの意見があった。

しかし、よい経験になったという感想ばかりではない。反省を書き連ねる者も数名存在した。

「準備時間が昨年以上に足りなかった。それが露呈するところもあり、やや心配であったが、最後の里山活動ということもあり、なんとか乗り切れたことは大きい」（Y・Y　女子学生4年生）とか「竹楽器づくりのときには終了予定時間が大幅に伸びることになってしまった。予行練習をしたにもかかわらず、結果が出せなかったことは反省すべき点である」（M・H　女子学生4年生）と次回以降の機会に、反省点を生かそうとする学生の姿勢がうかがえるのである。

しかしながら、学生が子どもと関わる経験が十分にできたことはもちろんであるが、地域の教育の一環を担えたことや、地域住民の方とのふれあいを通じて、M町と田中ゼミ、ひいてはK大学（教育学部）が教育的交流で絆が結ばれたことは、大きな成果であったのではなかろうか。

里山活動の成功の裏で、今後の課題もいく

つか見えてきた。つねに参加スタッフの数が安定しているとは限らない。場合によっては、スタッフの人数が多くなくてもできる方法を工夫することも必要である。数が集まらなければ獲得募集に努めなければならないこともある。

さらにスタッフがいつも常置することも難しい。次代に受け継ぐ形で、新たなスタッフの養成においても力を注がなければならないであろう。

学生については、参加する子どもらへの細かな配慮、声がけなどがそうである。まだまだこのあたりについては極めて経験が少ない。また咄嗟の出来事や予定変更に対処できない、という点も見逃せない。児童も人間であり、「生物（なまもの）」である。学生等の予 想以上にいろいろことが起こる。あらゆる事象に対応できるだけの力と、慌てずに落ち着いて対応できる力が学生らに求められることは必至である。さらに企画の単一化の問題も 避けられない。里山でできる新たな自然体験プログラムについても検討していかなければ ならないであろう。

今後の課題を列挙しながら、田中ゼミの後継となるべく、有志学生らが次年度に継続できる里山自然体験活動になるよう、祈念してやまない。

なお、写真のご提供、掲載に関しては、（http://www.town.miyashiro.lg.jp/0000010260.html）から抜粋していることをさきにことわっておきたい。またこのたびの里山活動の取り組みにご尽力いただいたM町町民生活課の方、NPO法人さいたま緑のトラスト協会の方々に厚く御礼申し上げます。

## 【引用・参考文献】


１）田中卓也・兼古勝史・小林田鶴子「専門演習におけるフィールド体験活動―地域の聴覚的価値の発見―」『共栄大学教育学部研究紀要』第3号、2018

２）田中卓也「専門演習における地域と連携した取り組み（３）」『共栄大学研究論集』第16巻、2018.pp2 ～ 5

３）田中卓也・兼古勝史・小林田鶴子「専門演習における地域と連携した取り組み（２）－宮代町里山自然体験活動を中心に―」共栄大学研究論集.第15巻、2017.pp1 ～ 2

４）小林田鶴子・田中卓也「専門演習における地域と連携した取り組み－宮代町里山自然活動を中心として－」.共栄大学研究論集第14巻、2016.pp1 ～ 4

６）加藤隆秀「学校林としての里山有効活用について―環境教育の視点から里山保全活動・自然体験活動を通して―」宇都宮大学地域連携教育研究センター .地域連携教育研究センター研究報告第22巻、2014

７）片山雅男「保育・教育にとっての里山の教育効果について―里山の自然と生活から子ども達が学ぶこと―」.夙川学院短期大学研究紀要第44巻、2017

８）上田憲嗣・寺見章・栗田喜勝・加藤博仁・上田豊・小池源吾・中野明子・秀真一郎・藤井伊津子･雲津英子「体験型授業科目『里山総合演習』の教育効果の検証―オーセンティック・アセスメントと身体活動量に着目して―」.吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）第24号、2014

９）文部科学省「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」中央教育審議会答申、2013年

１０）下村一彦・佐東治・村上智子・本間日出子「山形県での里山保育の普及に向けた保育者養成の取組」.東北文教大学・東北文教短期大学部紀要第6号、2014